

中世スペイン語の定冠詞用法について

Sobre el uso del artículo definido en español medieval

岡本信照
Shinshou OKAMOTO

0. はじめに

中世期のスペイン語を特徴づける要素の一つに冠詞の未発達が挙げられる。ここで言う“未発達”とは、“現代文法から見て冠詞が使用されるべき箇所でも冠詞が脱落している場合がある”という意味である。

本稿では、12～14世紀のスペイン語における定冠詞有無の揺れが目立つものの中から、特に“唯一物を示す名詞”と“総称的意味を持つ名詞”の場合に着目して、定冠詞機能の発達について考察してみたい。⁽¹⁾

1. 定冠詞の起源について

本題に入る前に、定冠詞の起源について概観しておく。

ロマンス諸語の定冠詞はラテン語指示形容詞の ILLE 又は IPSE の意味の弱화에由来するという説が一般に受け入れられている。しかし、指示詞と冠詞の明確な分化がいつ始まったかに関しては諸説があり、一概に結論を下すことはできない。ともかく俗ラテン語の文献には既に冠詞の萌芽が見られるのは事実であり、定冠詞の機能上の起源を認めることに異論はない。

1-1 古典ラテン語には下図のように指示詞が厳密に体系化されていた。

anáfora	déixis	identidad
is	hic (これ) iste (それ) ille (あれ)	ipse

ところが後期ラテン語ではこの体系が崩れ、各々の指示詞の機能圏が相互に交わり出したのである。すなわち、hic と iste, hic と is, ille と ipse 等がそれぞれ機能的役割を混同するに至ったのである。⁽³⁾ これは、場面内指示語の体系内における示差特徴 [±proximidad] の喪失を意味する。そして、俗ラテン語の文献では ille と ipse の頻度が極めて高くなっている。

Locus etiam, ubi fuit titulus uxoris Loth, ostensus est nobis, Sed mihi credite, domine venerabilis, quia columna *ipsa* iam non paret, locus autem *ipse* tantum ostenditur: Nam episcopus loci *ipsius*, id est de Segor, dixit nobis quoniam iam aliquot anni essent, a quo non pareret columna *illa*. Nam de Segor forsitan sexto miliario *ipse* locus est, ubi stetit columna *illa*, quod nunc totum cooperit aqua. (*Itinerarium Egheriae*, 5c 初?)

上記の引用文では、*ille, ipse* は所与の文脈中で繰返し述べられる対象を照応させているのに過ぎず、機能的には定冠詞に近い。

1-2 俗ラテン語 *ille, ipse* のこのような多用が、後のロマンス諸語の定冠詞へと発展することを我々は容易に感知できる。³⁾ しかし、当時の *ille, ipse* には、現代語の定冠詞に比べてかなりの制約があった。次に列挙したものがその主な用法である。

- i) 主に可算名詞と組合わさった前方照応的（あるいは後方照応的）用法。
- ii) 形容詞と組んで、それを名詞化する。
- iii) 関係詞の先行詞になる。

i) は前節で述べた通りの *ille, ipse* の支配的な用法である。ii) と iii) は言うまでもなく、現代語の定冠詞の名詞化機能に継承される。

従って、以下に述べる定冠詞の用法が *ille, ipse* に欠けている。⁴⁾

- iv) 唯一物を表わす名詞に付くもの。
- v) コンテキスト外の特異な状況による暗黙の限定。(例えば、¡*Abre la ventana!* のように、“対話者が場を共有する”という条件が対象を限定する場合の定冠詞用法)。
- vi) クラス全体を総称的に表わすもの。(El *hombre es mortal.* における場合の定冠詞用法)。
- vii) 固有名詞、あるいはそれを同格補語とする普通名詞に付くもの。(el *Góngora, el Tajo, el rey Carlos* 等の用法)。

1-3 前節で述べた i) から vii) までの定冠詞用法は今日では常識的であるが、その中の iv) から vii) までには、同一の文脈内に定冠詞を伴う指示対象が前もって明示されていなくとも使用できる場合である。この用法こそが俗ラテン語の *ille, ipse* に欠如している。つまり、“以前に明示的に言及されている名詞”に使用されるに限られ、テキスト内での“具体的な呼び起こし”と結びついているのである。⁵⁾

以上のことから、俗ラテン語の *ille, ipse* は古典期に比べればその頻度数は極度に高くなったとは言え、決して“冠詞”という新たな文法範疇が自律的に既に成立していたとは考えられないのである。むしろ何らかの文体論的価値が強く、現代語の定冠詞より遥かに文脈への依存度が高かったと言える。従って、ロマンス諸語の定冠詞は、“俗ラテン語指示形容詞 *ille, ipse* の機能的ヴァリエントに起源を発する”と考えるのが妥当であろう。

2. 中世スペイン語の定冠詞使用の揺れ

それでは、主に12~14世紀のスペイン語において定冠詞使用と無冠詞の間に揺れが目立つものを概観してみよう。

2-1 先ず“唯一物を表わす名詞”に時折定冠詞の脱落が起こる。⁶⁾ *Cantar de mio Cid* (1140?) の中から問題になる語は以下のものがある。

cielo (天): 14例中7例無冠詞。但し、*Dios del cielo* (2155), *los cielos* (2855) のように単数属格と複数時には定冠詞が使用される。

luna (月): 無冠詞 1 例のみ。
oriente (東): 無冠詞 2 例のみ。⁽⁷⁾
paradiso (天国): 無冠詞 2 例
Santa Trinidad (三位一体): 無冠詞 2 例

Milagros de Nuestra Señora (1246-52) の中で問題になるのは以下の通りである。

paraíso: 7 例中 6 例無冠詞
(cf. cielo は全て定冠詞使用)
sol (太陽): 4 例中 1 例無冠詞
luna: 無冠詞 1 例のみ

1260年聖書マルコ伝においては、cielo 18 例全てに定冠詞を伴っているが、infierno (地獄) 2 例いずれもが無冠詞である。それから、Espíritu Santo (聖霊) 全 8 例中 2 例だけ無冠詞で現れている。

14世紀に入っても尚、冠詞を欠いているものがある。El conde Lucanor (1335) では、
paraíso: 8 例中 4 例無冠詞。

(しかし、cielo, infierno 等は常に冠詞を伴っている。)

そして Libro de Buen Amor (1343) では、

paraíso: 10 例中 2 例無冠詞
infierno: 9 例中 1 例無冠詞
(しかし cielo は全て冠詞付き)
sol: 無冠詞 2 例
luna: 無冠詞 1 例
Espíritu Santo: 8 例中 7 例無冠詞

Milagros de Nuestra Señora, Libro de Buen Amor 等の韻文の場合は、音節数を揃える必要から冠詞が省略されたと推測できるものも少なくない。しかし、El conde Lucanor のような散文においてさえ、paraíso のように定冠詞使用が定まっていない場合がある。

そもそも唯一物名詞が一部の慣用句 (hace sol, de sol a sol, etc) を除いて常に定冠詞を伴って現れるのは、“指示対象の存在が唯一であるという普遍的事実が経験的に知られている” からである。定冠詞の最も初源的な用法である前方照応が“文脈そのものに依存して行われる限定・特定化”であるとするならば、唯一物のように常に定冠詞を用いるのは“文脈外の事実に基づく限定・特定化”によるからだと言える。⁽⁸⁾ 俗ラテン語 ille が後者の限定理由では使用されなかったことに、中世のスペイン語定冠詞にこの用法が完全に浸透していなかったことの歴史的一因を窺うことができよう。

2-2 唯一物名詞と並んで問題になるのが固有名詞の場合である。

現代文法で固有名詞と定冠詞が直接結付くものは、いくつかの国名(但し修飾語を伴う場合は全ての国名)及びいくつかの地域名、海洋・河川・山脈その他の自然の名称、そして人名に先行してその“作品”を意味するも

の、複数で家族「～家の人々」を表わすもの、等がある。⁹⁾ところが中世を通してこのような場合に定冠詞を伴って現れる固有名詞は希である。

açerca corre *Salón* (Cid., 555)

Arlançón passava (Cid., 1954)

qe yaze sobre *Tajo* (Milagros., 48b)

non te fartaria *Duero* con el su aguaducho; (Buen Amor., 246c)

Cid には河川名が20例あるが、定冠詞と共に現れるのは次の一例だけである。

～ *el Duero* va passar, (Cid., 401)

その他14世紀までの作品中で河川名は全て無冠詞である。¹⁰⁾

山脈名は、*los Montes Claros* (Cid., 1182, 2693) のように複数形で冠詞を伴うが、*monte Calvarie* (Cid., 347) のように無冠詞のものもある。

「～の作品」を意味する冠詞も中世には見当たらない。

Si leyeres *Ovidio*, el que fue mi criado,

en él fallarás fablas quel ove yo mostrado. (Buen Amor, 429 a-b)

現代文法では、“固有名詞を同格補語とする通称名詞”にも定冠詞が使用されなければならない。すなわち、“ある特定のクラス（親族・社会・軍事）の中のあるカテゴリーあるいは階級において人名を定める通称名詞が人名に先行する時、冠詞を伴う”わけである。¹¹⁾（例：*el rey Carlos III, el cardenal Belarmino, etc.*）

しかし *Cid* では時々無冠詞で現れる。¹²⁾ この作品中に無冠詞で用いられる場合があるのは以下の通りである。

rey Alfonso: 55例中9例無冠詞

obispo don Jerome: 16例中3例 //

rey Tamía: 無冠詞1例のみ

rey Búcar: 3例中1例無冠詞

comde don García: 4例中2例無冠詞

comde don Remont: 10例中1例 //

iffantes de Carrión: 88例中86例 //

muger de mio Cid: 2例中1例 //

fijas de Campeador: 10例中8例 //

condes de Carrión: 無冠詞3例

iffant Ferrando: 無冠詞1例のみ

13世紀以降は、この場合定冠詞がほぼ完全に定着しており、特に問題はない。

固有名詞との結び付きが強い普通名詞が常に定冠詞を伴うのは、その同格補語たる固有名詞によって自動的に限定・特定化されるからに他ならない。前節で述べた唯一物名詞の場合は、それが指示する対象に内在している“唯一性”という特徴が、話者に「特定化された」と見做されて定冠詞を必要としたのであった。固有名詞を補語とする名詞も、ある意味では唯一物名詞と同種のものである。というのは、同格補語限定辞としての固有名詞

が先行の通称名詞に“唯一性”を内在化させるからである。

俗ラテン語では唯一物の場合と同様、単に固有名詞を伴うという理由だけで、コンテクストに左右されることなく *ille* を使用するという事はなかった。初期のスペイン語でも定冠詞の有無が不安定であることから、固有名詞を補語とする名詞に先立つ定冠詞の発達は、唯一物の場合と同一延長線上にあると考えられる。

2-3 現代語の定冠詞の重要な機能の一つに“El hombre es mortal.”のように名詞に総称的意味を持たせるものがある。勿論俗ラテン語 *ille* にこの機能はなく、ロマンス諸語に分化してから後に、定冠詞に一つの新たな機能として加わったものであろう。初期のスペイン語においては、総称的・集合的意味を持つ名詞は無冠詞である。⁴³

Mal se aqueixan los de Valençia que no sabent ques far, de ninguna part que sea, non les venie pan; nin da consejo padre a fijo, nin fijo a padre, nin amigo a amigo nos pueden consolar.

(Cid., 1174-1177)

一般的意味（～というもの）を持った名詞が無冠詞で用いられる例は、現在では諺に見られる。本来この場合に定冠詞を用いなかった名残りであろう。

Hombre avariento, por uno pierde ciento.

(二兎を追う者は一兎をも得ず。)

Pájaro viejo no entra en la jaula.

(亀の甲より年の功。)

14世紀になると散文においては、一般的意味を表わす定冠詞はほぼ定着している。

Et, señor conde Lucaror, deveredes saber que *el mundo* es tal, (Lucanor, X°, p. 41)

La razón faz *al omne* seer omne: (ibid., p. 213)

Patronio, porque yo sé que *la muerte* non se puede escusar, (ibid., XL p. 144)

しかし、同世紀の韻文では、音節数を揃える必要性も関与していると思われるが、依然無冠詞で現れることが多い。

por mala dicha pierde *vassallo* su señor. (Buen Amor 424c)

“Buscad con quien caseades, ca *dueña* non se paga de perezoso torpe nin que vileza faga.”

(Buen Amor, 467 a-b)

Diz: «Quando quier casar *omne* con *dueña* mucho onrada, (Buen Amor, 97a)⁴⁴

そもそも単数定冠詞が一群の対象を「総括的」に表わすと解釈されているのは、特定集団全体の特殊性を定冠詞で表わすためである。一つの集団は全体で一つの個体と捉えることができるから、集団全体の特殊個性を定冠詞が表わし得るのである。⁴⁵つまり、何をもって一つの単位と見做すかという“個別化”の概念が、個々の対象ばかりでなく、その指示された対象の総体にまで及んだ結果であるという解釈が成立つ。従って、総称的意味を表わす定冠詞の使用は、所与の文脈内での前後関係が決定するのではない。俗ラテン語 *ille* が前後関係に依存してのみ使用されていたことを想起すれば、この種の定冠詞用法はかなり進歩したものであり、中世スペイン語においてその定着が遅いのも頷ける。

3. 結 び

俗ラテン語指示形容詞からスペイン語定冠詞への機能上の発達過程をまとめてみよう。

- (I) 俗ラテン語指示形容詞 *ille, ipse*, すなわち定冠詞の最も初源的な機能。(但し, 自律的文法範疇としては確立していない。)
- 前方・後方照応的用法 (まだ文体論的価値が濃い)。
 - 形容詞の名詞化。
- (II) (ロマンス諸語に分化して) 文脈外要素に基づく限定・個別化機能が加わる。(すでに自律的文法範疇として成立しているが, その用法は完全に定着していない。)
- 対象が唯一の存在であると“普遍的に知られている”ことによる限定。
 - 固有名詞を補語とすることによる特定化。
 - その他, 特殊な状況が決定する暗黙の限定。
- (III) “個別化”という概念が拡大する。
- 特定の対象の総体をも定冠詞で表わす。
- (IV) 固有名詞と直接結び付く。(定冠詞使用の定着は16世紀以降と思われる。)
- 山脈・河川・海洋・諸島等の自然名や地名に付される。
 - 人名に直接付いて, 「～家の人々」「～の作品」を意味する。

中世スペイン語, とりわけ *Cantar de mio Cid* の中で定冠詞の有無に揺れが見られる用法は全て, 俗ラテン語 *ille* にはなかった用法なのである。我々が当時の冠詞使用の不安定さを感知するのは, 上述の(II)(III)(IV)に見られる定冠詞機能がまだ完全に浸透していなかったことに帰因するのである。

要するに, 文脈内の要因に依るのであれ, 外的要因に依るのであれ, 限定・特定化された対象を他のそれと区別する必要性が背景にあって, ロマンス諸語では冠詞が飛躍的に頻度を増し, 文法的自律性を獲得するに至ったのであろう。そして, 中世を通して冠詞使用が次第に安定化へと向かって行ったと考えられる。

注

- (1) 本稿は, 1990年5月19日, 京都産業大学で開催された日本ロマンス語学会第27回大会での口頭発表に加筆・補正したものである。
- (2) I. Jordan y M. Manoriu, I, p. 301.
- (3) ロマンス諸語定冠詞の形態上の推移は,
ILLE (主)>仏: *le*, 西: *el*, 伊: *il*, ル: *-ll, -l*
ILLUM (対)>ポ: *o*, 西レオン・アラゴン方言: *lo*
IPSE (主)>カタ: *es*
IPSUM (対)>サルディニア: *su*
となった。
- (4) Renzi, p. 196.
- (5) *ibid.*, p. 196.
- (6) M. Pidal, p. 302.
- (7) Oriente/occidente, levante/poniente 等方角を表わすものは現代スペイン語でも定冠詞使用は義務的ではな

い。Abad Nebot, pp. 47-48.

- (8) 限定を引起こす要因である“文脈”の類型に関しては、Coseriu が興味深い研究を行っている。彼は先ず、コンテキストを、① contexto idiomático, ② verbal, ③ extraverbal の3種類に分ける。前方・後方照応は②に属し、言語外事実によるものは全て③に属する。彼はさらに③を、④ contexto físico, ⑤ empírico, ⑥ natural, ⑦ práctico u ocasional, ⑧ histórico, ⑨ cultural の6種に下位分類している。“唯一物”は彼の類型論に従えば、⑥に属することになる。Coseriu, pp. 313-317.
- (9) Alcina y Blecua, pp. 563-564.
- (10) Fray Luis de León は彼の作品で、*el Miño, el Tajo* 等河川名には全て定冠詞を伴っている。従って16世紀以降には、この用法があったと思われるが、Lazarillo de *Tormes* の如く同時代でも作品によって冠詞欠如が見られる。
- (11) Alcina y Blecua, p. 560.
- (12) M. Pidal, pp. 305-306, García de Diego, p. 335.
- (13) García de Diego, p. 335.
- (14) この引用文に現れる *omne* は、当時非人称受身 *se* の機能を果たしていた *omne* と紛らわしいが、前後関係から見て、*dueña* (婦人一般)に對置する *omne* (男一般)と解すべきであろう。しかし、非人称の *omne* (人々一般)の発達も、その出発点において“一般的意味を表わす名詞は無冠詞であった”ことが一要因として関わっていると筆者は考えている。
- (15) 宮下, p. 111.

使用テキスト

- “Itinerarium Egheriae”, Díaz y Díaz, M. C. Antología del latín vulgar², pp. 80-87, Madrid, Gredos, 1962.
- Anónimo, “Cantar del Cid”, ed. de Menéndez Pidal, Madrid, Espasa-Calpe, 1985.
- Berceo Gonzalo de, “Milagros de Nuestra Señora”, ed. de Vicente Beltrán, Barcelona, Planeta, 1983.
- “Evangelio de San Marcos” (Biblia 1260).
- Don Juan Manuel, “El conde Lucanor”, ed. de C. Alvar y P. Palanco, Barcelona, Planeta, 1984.
- Arcipreste de Hita, “Libro de Buen Amor”, ed. de A. Blecua, Barceloua, Planeta, 1983.

参考文献

- Abad Nebot, F. “El artículo. Sistema y usos.”, Madrid, 1977.
- Alcina F y M. Blecua: Gramática española, Barcelona, Ariel, 1975.
- Alonso, Amado.: “Estilística y gramática del artículo en español”, Estudios lingüísticos, Temas españoles³, pp. 125-160, Madrid, Gredos, 1967.
- Coseriu, E.: “Determinación y entorro”, Teoría del lenguaje y lingüística general³, pp. 282-323, Madrid, Gredos, 1973.
- García de Diego, V: Gramática histórica española³, Madrid, Gredos, 1970.
- Jordan, I y Manoriu, M.: Manual de lingüística románica, Tom I, Madrid, Gredos, 1972.
- Lapesa, R.: “Del demostrativo al artículo” NRFH, Tom XV, pp. 23-44, 1961.
- Menéndez Pidal, R.: Cantar de mio Cid, Vol I, Madrid, Espasa-Calpe, 1944.
- Meyer-Lübke, W.: Grammaire des langues romanes, Tom III Syntaxe, Marseille, 1974.
- Renzi, L.: Introducción a la filología románica, Madrid, Gredos, 1982.
- 宮下眞二:「変形文法の展開とホーキングズの冠詞論」現代言語学批判 pp. 91-117, 勁草書房, 1981。